

# ノンバーバル・コミュニケーションの諸相

大黒 岳彦\*

本稿が考察・分析する対象は、そのタイトルからも明らかな通り「ノンバーバル・コミュニケーション」である。とはいっても、本稿は決してそうでなくとも百家争鳴・百花斉放状態にあるあまたのノンバーバル・コミュニケーション論に更に新たな一章を加える趣意はないし、あるいはそうかといって、錯綜状態にある斯学の思想的な地図をたんに描き出すことを目指すものでもない。われわれの目標は、前言語的・非言語的な「メディア」である「身体」による社会的基層の構成メカニズムを理論化する「身体メディア」論の構築にある<sup>1</sup>。このわれわれの目標によって、本稿のノンバーバル・コミュニケーションに対するアングルとスタンスは設定され方向づけられている。すなわち、一つには既存のノンバーバル・コミュニケーション論の各々について、それぞれが抱懐する所説に一々応接する、というよりは、それらが暗黙の裏に前提している存在論的な了解や、「身体」観、コミュニケーション観をまずは対自化することが目指される。そしてその上で、同じ轍を踏むべきでないものについては、これを他山の石とし、逆に本質的洞察を含むものについてはその意義を積極的に評価することで、われわれの理論構築に役立てたい。もちろん、以下の本論を一読すれば明白な通り、本稿は体裁上は、ある種の学

説史的、また学説分類的な記述スタイルを採っている。にもかかわらず、その根底にある企図は前述の通りであることを事前に了解されたい。

## 1. ノンバーバル・コミュニケーションの定義と分類

既に指摘した通り、「ノンバーバル・コミュニケーション」論の分野は「ジェスチャー論」「表情論」「パラ・ランゲージ論」など諸説が入り乱れ、一種の錯綜状況を呈している。これは決して故無きことではなく、そもそもその扱う対象・事象が一義的に確定できないことに淵源している。「ノンバーバル・コミュニケーション」という対象自体が「ノンバーバル」つまり「バーバル」ではないコミュニケーションという形で消極的にしか規定されておらず、したがって「バーバルではない」という共通点を有するだけの種々雑多なコミュニケーション形態が「ノンバーバル・コミュニケーション」というカテゴリーの下で没系統・無規律に乱立・併存し、内的な連関が明らかにされない儘これらが一緒くたにされ一括されている<sup>2</sup>。

こうした事態から、まず逆に浮かび上がってくるのは、コミュニケーションという社会事象の中心的なメディアを「バーバルなもの」＝「言語」と

\* 明治大学情報コミュニケーション学部 助教授

1 「身体メディア」論の概要に関しては、「身体メディア」論へのプロレゴメナ——社会構成の身体的次元（『社会情報学研究』9巻1号）および「身体メディア」論・序説——ルーマン理論からの内破の試み（『思想』No.970）を参照。

2 統合的なノンバーバル・コミュニケーション論の構築を目指す試みがないわけではない。Miles L. Patterson, *Nonverbal Behavior: A Functional Perspective*, Springer-Verlag, New York Inc. 1983（邦訳『非言語コミュニケーションの基礎理論』工藤力監訳、誠信書房）はそうした試みの一つとして挙げられるが、これも機能主義を謳ってはいるものの、やはり列挙的・網羅的であって、結局は統合のためのノンバーバル・コミュニケーションに対する原理的洞察に欠いている。

見做す、という隠然たると同時に嚴然・牢固たる了解である。「ノンバーバルなもの」＝「非言語」メディアは、コミュニケーションにおける周辺の地位・補助的地位を占めるに過ぎないもの、コミュニケーションにおけるエピソード的な現象として、言語メディアならざるものとして、貶置される。こうしたコミュニケーション了解における「言語中心主義」ないし「言語モデル」については、後論で再度詳細に検討する機会を持つことになる。

では、「非言語」性という消極的な規定以外に、「ノンバーバル・コミュニケーション」を積極的に枠付けるような規定は存在しないのだろうか？ われわれが注目したいのは、「ノンバーバル・コミュニケーション」の成立要件、*conditio sine qua non* として、コミュニケーションへの参加者が、互いにその身体を知覚し合っていないなければならない、という事実である。この「身体的共現前」こそが「ノンバーバル・コミュニケーション」の必要条件であり、「ノンバーバル・コミュニケーション」の同義語としてしばしば「対面的相互行為」(face-to-face interaction)の語が使われる根拠にもなっている。この条件をもし疑うものがあれば、身体的共現前を前提しないノンバーバル・コミュニケーションを試しに思い泛かべてみるがよい。テレキネシスやテレパシー、テレグジステンスといったオカルトの事態をしか表象不可能の筈である<sup>3</sup>。とはいえ、身体的共現前は必ずしもその十分条件をも構成するものではない。なぜなら身体的共現前、対面的相互行為の場にあっても尚、言語的な、バーバルな、コミュニケーションは可能だからである。したがって、身体的共現前というノンバーバル・コミュニケーションが生

起する「場」についての規定に加えて、言語に替わるコミュニケーションのメディアの指定が要請されることになる。われわれとしては「ノンバーバル・コミュニケーション」において“使用”されるメディアを「身体」と総称したいのだが、この主張を権利付けるためにも、既存の「ノンバーバル・コミュニケーション」論を、メディアという見地から通覧・分類しておこう。勿論メディアという見地からの分類といっても、画定的・一義的な分類はあり得ない。ここでは網羅性を優先しつつ、できる限り簡潔かつ合理的な分類を試みることにする。考えるメディアは以下の通りである。

- ①動作、②表情、③視線、④姿勢、⑤接触、  
⑥声、⑦臭い、⑧外観、⑨距離。

当然のことながら、全てのノンバーバル・コミュニケーション論が上記のうちの一つのメディアをそれぞれ専一的に論じているわけではなく、その多くは複数のメディアに論及している。次々節で取り上げる心理・行動学者P.エクマンは②の「表情」を基礎としながら①～⑥にわたる広いレンジのメディアに論及しているし、R.バードウィステルは「<sup>キネジックス</sup>動作学」(Kinesics)の名の下に①～⑤のメディアを扱っている。また、ノンバーバル・コミュニケーション論流行の魁ともなった「<sup>プロクセミックス</sup>近接学」(Proxemics)は、人類学者T.ホールが③～⑨を独自の観点の下に組織的に纏め上げたものである。ではあるのだが、そうしたノンバーバル・コミュニケーション論が扱う個々のメディアを分析的に取り出したときに上記の①～⑨が析出される。

さて、われわれは以上でノンバーバル・コミュニケーションのメディアが網羅されたと信じるのだが、この結果から明白な通り、①～⑨の特性は

3 「電子会議」や「オンライン・ゲーム」はどうなのだ、と借問する向きもあるかもしれない。実は、電子メディアは確かにノンバーバル・コミュニケーションにおける身体的共現前という大前提を技術的に失効させる。この論点は、しかし、稿を改めて主題的に論じなくてはならない大テーマであるゆえ、本稿では考慮の外に置く。

それが例外なく「身体」に関わるメディアであるという点である。万全を期すために、われわれの主張を明瞭ならしめる工夫を施そう。①「動作」は、普通には「仕草」や「ジェスチャー」と呼び習わされているものであるが、これを「なんらかの身体の動き」と広義に解して②～⑤までを包含させることが可能である。また⑥～⑧も「身体属性」として纏めることができる。問題は⑨「距離」である。これは、T.ホールが距離の違い（例えば「密接距離」「個体距離」「社会距離」「公衆距離」）が惹起する感覚・心理変容やメッセージ性に焦点を当てるために主題化したノンバーバル・メディアとして有名であるが<sup>4</sup>、このメディアは身体の動きでもなければ身体属性でもない。にもかかわらず、やはりこのメディアもまた「身体」関与的である。なぜなら「距離」の中心・原点が常に「身体」であり、したがって、この場合の「距離」とは身体を零点とするパースペクティブ構造ないし他の身体との関係に他ならないからである。こうして、①～⑨のノンバーバル・コミュニケーションのメディアは、更に（α）身体の動き（①～⑤）、（β）身体属性（⑥～⑧）、（γ）身体パースペクティブないし身体関係（⑨）、という三つの「身体」性メディアとしてカテゴライズできる。

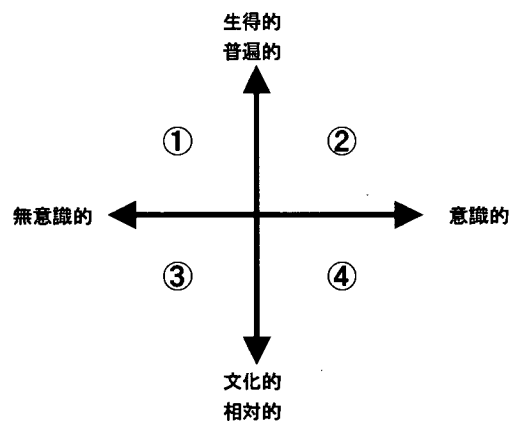
以上で、われわれの見地からする「ノンバーバル・コミュニケーション」の積極的定義が得られたことになる。その定義とはこうである。すなわち「ノンバーバル・コミュニケーション」とは、(1)身体的共現前の場における、(2)身体をそのメディアとするコミュニケーション、である。

## 2. ノンバーバル・コミュニケーション論の類型とその暗黙の前提

前節では様々な「ノンバーバル・コミュニケー

ション」論が取り扱うメディアの共通性に注目することで、「ノンバーバル・コミュニケーション」の大枠的な定義が得られたわけだが、この大枠の中で今度はノンバーバル・コミュニケーションを如何なる理論的な文脈に位置づけ、如何なる方法論によって、それにアプローチするかを巡って様々な立場が分かれる。ここでは、「ノンバーバル・コミュニケーション」論内部で見られる二つの大きな対立軸に即する形で、立論のパターンを析出しよう。

対立軸の一つは、ノンバーバル・コミュニケーションを生得的ないし普遍的な事象と見るか、それとも状況依存的ないし文化的に相対的な事象と見るか、を対立の両極として設定される。いま一つの軸は、ノンバーバル・コミュニケーションを意識的な過程として捉えるか、それとも無意識的な過程と見做すか、という対立として構成される。勿論、全ゆるノンバーバル・コミュニケーションが完全に生得的であると主張したり、また、例外なく意識的な過程であると主張するような理論や立場は、事実として存在しない。〈普遍的—相対的〉〈意識的—無意識的〉というこの二つの軸が構成するマトリックス空間、四つの象限は、飽くまでもノンバーバル・コミュニケーション論の理論的



4 Hall, E.T. *The hidden dimension*, New York: Doubleday, 1982 (邦訳『かくれた次元』日高敏隆, 佐藤信行訳, みすず書房)

傾向を理念的に示すパターンであることに留意されたい。それでは順に見ていこう。

①〈普遍的一無意識的〉。この立場は、ノンバーバル・コミュニケーションへの生理学的・生物学的・動物行動学的なアプローチを特徴とし、「表情行動」「感情表出」を理論化に際してのモデルとする。例えば、次節でも取り上げるP.エクマンはどの民族にも見られる人類に普遍的な六つの基本感情の存在を主張し、実験・観察によって実証しようとする。その際、普遍性の根拠として持ち出されるのが生存のための「適応」(Adaptation)であることは注目してよい。つまりこの立場は、ダーウィンがその著『人および動物の表情について』で打ち出した立場の発展形といえる。ダーウィンは、表情表出行動は本来は環境適応のための明確な機能を有した行動だったものが、形骸化しその外形のみが残ってそれが遺伝によって受け継がれたもの、と解する。つまり基本感情やその表情行動は意識的なコントロールとは無関係に、DNAに書き込まれているのであり、その意味において表情行動・情動行動の生得性＝普遍性が主張されることになる。勿論あらゆるノンバーバル・コミュニケーションが生得的である筈はないが、この点については次節で触れる。ほぼ同様の主張が、ダーウィンの表情理論に基づきつつ感情心理学を体系化するC.イザードによってなされており<sup>5</sup>、また、エソロジストのE.アイベスフェルトは、人間のノンバーバル・コミュニケーションを行動進化の文脈の中で動物のノンバーバル・コ

ミュネーションとの連続性において捉える<sup>6</sup>。

②〈普遍的一意識的〉。この立場は人類の言語使用の普遍性に依拠しつつ、ノンバーバル・コミュニケーションを音声言語の前駆形態と捉える点にその特徴があり、具体的には18世紀の哲学者コンディヤックの「行為言語」(langage d'action)論<sup>7</sup>や19世紀に活躍した心理学者W.ヴントの「身振り言語」(Gebärdensprache)論において見られる<sup>8</sup>。この立場もまた、①と同様、まずは情動表出行動をモデルとするのであるが、但し「身振り」の独自性を情動からの超出と普遍的シンボルへの接近における過渡形態・中間形態と見る点で①と大きく異なる。例えば、ヴントによれば当初は情動と一体化し、個々の具体的状況に縛られた「指示的身振り」が、対象を身体によって描写する「叙述的身振り」を経て、対象が存在せずとも身体表現によって喚起する「シンボリック的身振り」へと進化し、最終的に音声言語として結実することになる。こうした主張から分かる通り、この立場はノンバーバル・コミュニケーションを外界模写的な構図で、どこまでも「言語」のアナロジーで捉えようとする。したがって、それは言語と同様「意識」にもたらされねばならず、またその「普遍」性も①においてのような生物学的な生得性としての普遍性ではなく、「言語」が有すべき普遍性であり、コンディヤックやヴントにとって「身振り」とは原初的な「普遍言語」に他ならない。

③〈相対的一無意識的〉。この立場は、身体行動を文化的に相対的な解釈さるべき暗号と捉え、

5 Izard, C.E., "Innate and universal facial expressions: Evidence from development and cross-cultural research". *Psychological Bulletin*, 115, pp288-299

6 Eibl-Eibesfeldt, *Grundriss der vergleichenden Verhaltensforschung*, 5th ed. München: Piper, 1977 (邦訳『比較行動学』1, 2 伊谷純一郎, 美濃口担訳, みすず書房)

7 Condillac, E. B. de, *Essai sur l'origine des connaissances humaines; Traite de systemes*, Slatkine Reprints, Geneve (reprint of 1821-2 ed. in Paris) (邦訳『人間認識起源論』古茂田宏訳, 岩波書店)

8 Wundt, W., *Völkerpsychologie Eine Untersuchung der Entwicklungsgesetze von Sprache, Mythos und Sitte. Bd. 1, Die Sprache*, 1900, 2 Die Gebärdensprache, Alfred Kroner Verlag, Stuttgart (邦訳『身振り語の心理』中野善達監訳, 福村出版)

したがってノンバーバル・コミュニケーションをコード化と脱コード化に媒介された記号論的なプロセスとして解する点に特徴がある。これは例えばコミュニケーション全般を記号を介したメッセージ交換過程と捉えた上で、ノンバーバル・コミュニケーションもまた身体行動という「記号」の解説による、意識化されざるメッセージの読み取りとして把握する記号論者T.シービオクや、距離や臭いといった自らにとっては意識されない身体属性・身体関係が持つメッセージ性を理論化したT.ホルの「プロクセミックス」などがこの範疇に入る。この立場の特徴は、異文化接触論、異文化理解論との連続性・親和性である。これは、自らの身体属性や身体行動によって構成されるノンバーバル・コミュニケーションが無意識的な過程であり、それが孕む意味やメッセージ性に当事者が無自覚である、つまりその文化的相対性に気付かないことから、メッセージの読み誤り、意味の取り違えといった誤解・コンフリクトが生じるのであり、したがって、互いが互いの身体行動・身体属性が持つ精確な意味を意識にもたらし、自覚的にコントロールすることによって相互理解が達成されるといった主張として具体化される。つまりこの立場は、文化的に相異なる身体コード同士が接触した際の、精確な相互的脱コード化を説く理論だといえる。

④〈相対的一意識的〉。この立場は、身体を使った人工的な言語理論である。最もわれわれに馴染みがあるのは、様々の「手話」理論、「ジェスチャー」理論であろう。また、身体による純粋言語の創造を企てた舞踏理論家のA.アルトーもまた、この立場に含め得る。この立場の特徴は、②の立場との類似性にもかかわらず、②が自然言語との連続性においてノンバーバル・コミュニケーションを解するのとは異なり、自然言語とは独立でありながらも、自然言語記号の完全な代替を果たす、な

いし、自然言語とは別次元での完結性と首尾一貫性を持った記号体系として身体行動を位置づける点にある。身体行動を記号として見る点においては、この立場は③にもまた比し得るが、しかし、③が記号の背後にある意味やメッセージを下意識的で不透明なものとして、したがって「解説」を要するものとして捉えるのに対して、この立場では、身体記号の意味やメッセージはコミュニケーションへの参与者全員の意識にとって完全に透明なものと想定されている点で決定的に異なる。

以上の様々な「ノンバーバル・コミュニケーション」論のパターン化的分類作業を通して、それぞれの立場の違いにもかかわらず、全ての立場に共有されている二つの前提が炙り出されたことにわれわれは気付く。一つは、コミュニケーション・メディアとしての身体が、常に「メッセージ」の担い手として、何らかの「意味」の担体として了解されていること。第二には、したがって、ノンバーバル・コミュニケーションがそうしたメッセージや意味の受け渡しのプロセスとして把握されていること、である。われわれは前者を、身体を言語（記号）のアナロジーで解する点で「ノンバーバル・コミュニケーション」論における「言語モデル」と、後者をメッセージの送信者から受信者への転送としてプロセスをイメージする点で「ノンバーバル・コミュニケーション」論における「転移モデル」としてそれぞれ対自化した。

次節以降では、この二つのモデルに拠った理論化の実相と、そこからの脱却の試みを、「ノンバーバル・コミュニケーション」論のいくつかの代表的理論に即しながら順次検討しよう。

### 3. 「メッセージ伝達」から「コミュニケーションの構造分析」へ

P.エクマンは1969年にW. V.フリーセンと共

に、ノンバーバル・コミュニケーションを五つのカテゴリーに分けることを提唱する有名な論文を発表<sup>8</sup>、爾後、この分類に賛同するにしろ、それを否定するにしろ、常に言及されるノンバーバル・コミュニケーション論の参照枠をつくった。

五つのカテゴリーとは①「表徴」(Emblem)<sup>エンブレム</sup>、②「例証的動作」(Illustrator)<sup>イラストレーター</sup>、③「調整的動作」(Regulator)<sup>レギュレーター</sup>、④「感情表出」(Affect Display)<sup>アフェクト・ディスプレイ</sup>、⑤「自己適応動作」(Self Adaptor)<sup>セルフ・アダプター</sup> ないし「身体玩弄動作」(Body Manipulator)<sup>ボディ・マニピュレーター</sup> である。

①「表徴」は、例えば親指と人指し指を丸めて「OK」のメッセージを送ったり、親指を下に向けて拒否の意を示したり、人指し指と中指で「V」の字を作って「勝利」宣言をしたり、といった特定の言語的記号との完全な互換性（したがって特定の言語的意味との一対一の対応性）を持つ身体動作である。②「例証的動作」は、例えば鳥の話をしている際に、両手をバタつかせて飛ぶ真似をしたり、重要な話の部分で拳で机を叩いたり、といった言語的コミュニケーションの補足情報の提示動作である。「表徴」との違いは、「表徴」がそれ単独でも意味を持つとは異なり、「例証的動作」はそれだけでは無内容であり、言語的コミュニケーションの中で初めてメッセージ性を持つことである。③「調整的動作」は、「傾き」や「視線の移動」や「身の乗りだし」のような会話の流れを早めたり、遅ったり、あるいは話者の交替を促したり、といった言語的コミュニケーションの形式的側面の調整に関わる動作である。これは「表徴」や「例証的動作」とは違って、言語的コミュニケーションの内容との直截的な関係性は希薄である。④の「感情表出」は読んで字の如くであるが、ここで若干注意が必要なのは、前節でのノンバー

バル・コミュニケーション論のタイポロジーの議論において、エクマンが表情行動・情動行動の生得性・普遍性を主張し、六つ基本感情を挙げることにすらしていたこととの関連性である。実はエクマンは感情行動それ自体と、その表出とをはっきりと区別する。前者は飽くまでも生得的で普遍的である。だが、後者の表出には文化毎に固有の規則がある。この「表出規則」(Display Rule)の相対性によって、感情の文化的差異をエクマンは説明する。例えば、イタリア人と日本人とで同じ怒りの感情（これは生得的）を抱いたとしても、その表出の仕方は異なる。つまり日本的な文化においては「怒り」の感情は押し殺すべきだという表出規則が、イタリア文化ではこれとは逆の表出規則があるために、感情の文化的な差異が生ずる、というわけである。ここで問題になっているのは「基本感情」そのものではなく「感情表出」のほうである。⑤「自己適応動作」「自己玩弄動作」は、会話中の「貧乏ゆすり」や「髪の毛を弄る」動作や「頭を掻く」動作などの、言語的コミュニケーションの内容には全く無関係の、メッセージ性を持たない動作である。

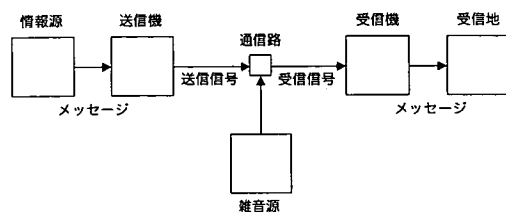
さて、われわれがこのエクマンのカテゴライズにおいて問題にしたいのは、分類項目それ自体の妥当性如何ではない。むしろ分類の方針であり、分類の意図である。あるいはエクマンの「ノンバーバル・コミュニケーション」観それ自体といってもよい。まず、何よりもエクマンにあつては、「コミュニケーション」とは「メッセージ」伝達の行為である。但し、コミュニケーションにおけるメッセージの伝送チャンネルは単線ではない。メッセージ伝達の幹線部分を担うのは勿論「言語」によるバーバル・コミュニケーションである。この

8 Ekman, P. and Friesen, W.V., "The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage and Coding." *Semiotica* 1, 1969

幹線を補足・補助する支線の総称が所謂「ノンバーバル・コミュニケーション」であり、支線群を構成するのが①～⑤までの各々のカテゴリーということになる。実際、エクマンの分類は、幹線チャンネルたる言語的コミュニケーションへの寄与度、およびメッセージの重要度と明瞭度を基準としてなされていることは明白である。「表徴」はもっとも「言語」に近く、その寄与度も高い。またメッセージ内容も極めて明瞭である。以下、「例証的動作」→「調整的動作」→「感情表出」となるにしたがって、言語的コミュニケーションへの寄与度は低下し、またメッセージの明瞭度も劣ってくる。そして寄与度ゼロ、メッセージ性皆無の「自己適応動作」「身体玩弄動作」に至る。

こうしたエクマンの発想の根底に、前節でわれわれが炙り出した二つの前提、「言語モデル」と「転移モデル」が伏在していることは火を見るよりも明らかである。そもそも「ノンバーバル・コミュニケーション」が「ノンバーバル」である以上、「言語」への仮託や比喩は無効の筈であるにもかかわらず、エクマンに限らず多くのノンバーバル・コミュニケーション論が言語モデルでノンバーバル・コミュニケーションを理解してしまっている。何らかの「メッセージ」や「意味」の担い手、記号・シンボルとして、ノンバーバル・メディアとしての身体行動が捉えられる。逆に言えば、身体行動のメッセージ性を探り、解読することこそがノンバーバル・コミュニケーション論の中心課題だとされる。

エクマンの所論から伺える通り多くの「ノンバーバル・コミュニケーション」論ではそれらが扱う身体的「メディア」の多様性の外観にもかかわらず、実はそれらが前提する構図は極めて単純



シャノンの「コミュニケーション図式」

である。対面的コミュニケーションを行う一方の側がある「メッセージ」を持ち、他方に「伝達」するのだが、その際「言語」とは異なる種々の「ノンバーバル」なメディアを使用するというだけである<sup>9</sup>。これはシャノンのコミュニケーション図式そのものであり、単にメディアが「言語」から「ジェスチャー」や「表情」といった身体行動に変わっただけである。

だが、この場合に問題なのはシャノンの図式を流用していることそのこと自体にあるのではない。問題なのはノンバーバル・メディアによって伝達されるという「メッセージ」なるものの身分である。一体「メッセージ」とは何なのか？ 結局のところそれは「言語」によってしか表現不可能な「言語的意味」なのではないか？ コミュニケーションを外部から観察する第三者がコミュニケーションの結果生じた反応や変化から「メッセージ」なるものを観察者の「言語」を使用して組み立て、それを「ノンバーバル」メディアを介して発信者から受信者へと運ばれ、「伝達」された「意味」として遡及的にコミュニケーション・プロセスの中に読み込んだものではないのか？ 論者によっては、この図式を人間以外の動物にまで拡張し「動物記号学」なる怪態な理論を立てる者まである<sup>10</sup>。しかしながら「メッセージ」の遣り取りを以てコミュニケーションの本質と見做すシャノンの構図を採り続ける限り、本当の意味

9 nonverbal communicationの訳語として「非言語伝達」が流通していることも、この認定の傍証となるだろう。

10 Sebeok, T. A., *Perspectives in Zoosemiotics*, Mouton, 1972

での「ノンバーバル・コミュニケーション」「身体的コミュニケーション」のメカニズムに迫ることは出来ない。それは単に言葉の上でだけ「ノンバーバル」を標榜しながら、その実「バーバル」メディアとしての言語を密輸入する態の偽られた“ノンバーバル”コミュニケーションでしかない。

エクマンの構図にあって更に問題なのは、上記のような複数のメッセージ伝達チャンネルの合成から全体としてのコミュニケーション行為が成立していると想定する要素還元主義的な発想である。この結果、一つのコミュニケーションの中に有機的に組み込まれているはずの様々なレベルのメディアが断片化され、孤立化させられることで、トータルなコミュニケーションの構造が毀損されてしまう。エクマンの分類は慥かに、タイプ別身体行動の特性分析としては成立しているかもしれないが、ノンバーバル・コミュニケーションの本質を捉え損なっており、その実相解明には程遠いと言わざるを得ない。

エクマンに代表されるような単なる身体行動の分類目録作りに対する批判と反省は、ノンバーバル・コミュニケーション論の内部からも早くから現われた。それが、A.ケンドン、S.ダンカンJr. およびE.ゴフマンのノンバーバル・コミュニケーションへの構造主義的なアプローチである<sup>11</sup>。

個々の身体行動は決して孤立して存在しているのではない。それは、まず始まりと終わりを持つ一つの「対面的相互行為」の枠組みと全体構造の中で初めて然るべき役割と意味とを受け取るのであり、また、先立つ身体行動と引き続き生じる次の身体行動との間での関係の中で、したがって一

連の行動連鎖のなかで初めて意味を与えられる。このような構造から切り離された個々の身体行動を分類してみたり、詮索しても何の意味もない。例えば「欠伸」という身体行動一つとってみても、それが白熱した議論の中で生じたものか、のどかな公園の会話の中で生じたものかによって意味は全く変わってくる。

このような対面的相互行為の構造を体系的にしかも綿密に分析し描き出したのがゴフマンである。したがって、以下ではゴフマンの所説に基本的に拠りつつ、必要に応じて他の論者に言及する形で、構造主義的アプローチの理路を辿ろう。

ゴフマンは、対面的相互行為の枠組みを成す纏まりを「フレーム」(frame)と称する。そして、このフレームによって意味づけられ生化される有意味な個々の身体行動を「ムーヴ」(move)と呼ぶ(コノテーションは若干異なるが、ケンドンは前者を「プログラム」(programme)、後者を「スロット」(slot)と称する)。この際、注目値することはゴフマンが対面的相互行為の分析を「ゲーム」や「芝居」のメタファーを利用しながら進めていることである(例えば先の「ムーヴ」は明らかにチェスの「駒を動かす」ことのメタファーである)。つまり、われわれの身体行動は、特定の場面や状況に固有の、役割やルールに拘束されつつ、またそこから意味を受け取りつつ続行される。但し、対面的相互行為が実際の「ゲーム」や「芝居」と異なる点は、そこには成文化された明示的な「台本」や「ルール」が存在しないことである。むしろ対面的相互行為の参加者は非明示的な〈役割〉や〈ルール〉をそのレパートリーの中から自ら選び出し、自らに割り振り、自ら演じ

11 ケンドンとダンカンJr.については、Raffler-Engel ed. *Aspects of Nonverbal Communication*, Swets and Zeitlinger B. V., 1980 (邦訳『ノンバーバル・コミュニケーション』本名信行、井出祥子、谷林真理子偏訳、大修館書店)を参照。ゴフマンについては、Goffman, E., *Frame analysis: an essay on the organization of experience*, Boston: Northeastern University Press, 1986, *Forms of talk*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981を参照。



従わなくてはならない。しかも、個々の「ムーヴ」が実はそうした非明示的な〈役割〉や〈ルール〉を再生産している。ゴフマンは、様々な対面的相互行為の場面に即しながら、そこに非明示的に伏在し、個々の身体行動を生化し意味づけている諸〈ルール〉を発掘することで、対面的相互行為の構造に迫ろうとするのである。

勿論、対面的相互行為には言語的コミュニケーションも当然含まれる。しかしゴフマンにあっては言語的コミュニケーションも広義の身体行動の一部（「トーク」(talk)）として扱われる。これは、エクマンが基本的にノンバーバル・コミュニケーションを「パラ・ランゲージ」として、すなわち、言語的コミュニケーションを補助する言語以外のコミュニケーション形態として、扱っていた姿勢とは対極を成す。言語的コミュニケーションによるメッセージの遣り取りが、対面的相互行為の中核なのではない。中核は飽くまでも様々な〈ルール〉から構成される「構造」としての「フレーム」である。われわれはゴフマンの「フレーム」概念そのものを、主題的な検討に値する極めて重要な概念だと考えるのだが、本稿ではその作業は断念する。ここではただ、それが「制度化された慣習」、われわれの言葉を使えば「実体化・自存視された身体図式」のレパートリーであると断言するに留めておきたい。

エクマンの理論的構図に較べれば遥かにノンバーバル・コミュニケーションの本質に迫っているといえるゴフマンの構造主義的アプローチだが、そこに問題がないわけではない。問題の一つは、「フレーム」という制度化された慣習の存在を既成のものとして立論の前提にしてしまっていることである。そのことはゴフマン理論がある意味で対面的相互行為の「構造」を前提した上での相互行為「戦略」の理論でもあることから明白である（ゴフマン理論を単純化・図式化したダン

カン Jr. は、対面的相互行為の主要要素を「構造」と「ストラテジー」の二つだとまで言い切っている）。そこでは「フレーム」そのものの生成という発生の問題が抜け落ち、蔑ろにされている。だが、この論点についてゴフマンに回答を要求するのは「無い物ねだり」かもしれない。むしろわれわれが見答めるのはより深刻な第二の問題である。

ゴフマンは、「構造」にフォーカスすることによってエクマンが陥っていた「転移モデル」からは脱却し得ているとわれわれは認定できる。では、「言語モデル」のほうはどうか？ ゴフマンはコミュニケーションに用立てられる身体動作を（「トーク」も含めて）「身体イデオム」と称する。これは身体動作までも制度化された慣習と見做すという点においては首尾一貫しているといえるのだが、身体動作をシンボル体系として「記号」として見做す、という点において、やはり依然として「言語モデル」の支配下にあると言わざるを得ない。言語的コミュニケーションの過大視を脱したかに思われたゴフマンですら、「言語モデル」の軛から完全に自由には成り得ていないのである。

#### 4. 微小動作と間-身体システム

エクマンに顕著に見られるような「言語モデル」と「転移モデル」に基づいたノンバーバル・コミュニケーション論からの脱却を志向する、構造主義的なアプローチとは異なるもう一つの理論的系譜が、実は存在する。それは「動作学」(Kinesics)を標榜するR.バードウィステルとその弟子のW.S.コンドンである。

「動作学」を提唱したのはバードウィステルだが<sup>12</sup>、彼によれば動作学とは身体行動の生理学的・骨格学的な分析を基礎としつつ、ノンバーバル・コミュニケーションにおける視覚的な側面に

フォーカスを定めた理論である。つまり、例えば「ウィンク」という身体行動を「品を作る」「誘惑する」といったメッセージ性においてではなく、「目蓋がどの位置でどのくらいの時間閉じられたか」という観点において観察する、そうしたアプローチである。

バードウィステルは「動作」学と所謂<sup>ジェスチャー</sup>「身振り」(gesture)論との違いを強調する。「身振り」とは、実は観察者の言語によって構成された意味を身体行動に読み込むことで成立した極めて恣意的な構成物であって、身体行動それ自体が有する本来の意味を損なうものである。更に言えば、「動作」には「身振り」的な意味付与から零れ落ちるものが多く存在する。例えば「目を閉じる」「目を大きく見開く」といった動作には身振りの意味を与えうる（前者は例えば「キスの要求」、後者は「驚き」などとして）が、「目を半開きにする」「片目だけがヒクつく」といった動作には身振りの意味を普通は与えない。動作を身振りの意味を持つもののみに限定することで、実際には存在している多くの身体動作を存在しないもの、無価値なものとして切り捨てる結果になっていることをバードウィステルは咎め戒めるのである。これは、先のエクマンのノンバーバル・コミュニケーションの五つのカテゴリーとの比較で言えば、エクマン等が①「表徴」や②「例証的動作」などの有意味動作を重要視し、⑤の「自己適応動作」「身体玩弄動作」を無意味な動作として貶下するのに対して、逆にバードウィステルは、「自己適応動作」や「身体玩弄動作」のほうをこそ動作の典型と見做すわけである。

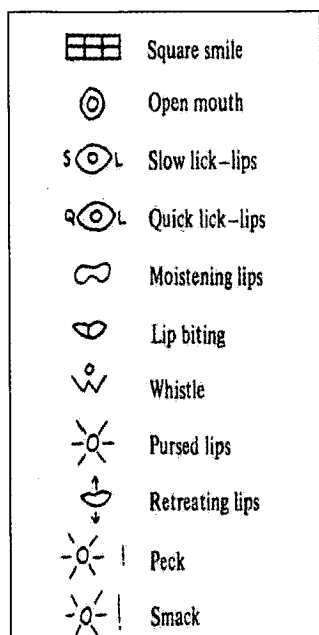
もちろんバードウィステルとして身体動作に全く「意味」を認めないわけではない。もし動作に「意

味」を一切拒否するときには、身体動作には途切れがなくなり混沌とした流れだけしか残らない。身体動作が一纏まりのものとして切り出される以上、そこには何らかの“意味”が存在している筈である。但し、その“意味”は身体動作の指示対象として往々にして持ち出される「メッセージ」という「言語」によって構成された「意味」ではない。そうではなく、それは他の身体動作との差異化・差別化（例えば、動きの遅速や移動距離・持続時間の長短など）という表層的なレベルでの Gestalt としての“意味”である。バードウィステルは、こうした身体動作の表層的な“意味”を「差異的 (differential) 意味」と呼ぶ。そしてこの差異の意味によって切り出される身体動作の最小単位を「<sup>カイン</sup>動作」(Kine) と称する。

バードウィステルが、身体行動を「記号」と見做した上で、その記号に対応する「(言語的) 意味」を割り振るといった、言語学の「意味論」<sup>セマンティクス</sup>の構図をそのままノンバーバル・コミュニケーションに持ち込む類の極めて安易な発想と手を切り、身体動作の表層分析に徹すると宣言したことは、彼を以て言語メタファーをノンバーバル・コミュニケーション論に導入した代表格の如く扱い、異端理論の不名誉なレッテルを貼る巷間の謂われなき評価とは逆に、むしろエクマン等多くのノンバーバル・コミュニケーション論が暗黙の前提としている「言語モデル」からの訣別へ向けての決定的な一歩を踏み出したものとして高く評価できる。また「言語モデル」の否定は、身体行動の「メッセージ」性の否定でもあり、したがってノンバーバル・コミュニケーションが「メッセージ」転送プロセスであることの否定であり、このことは直に「転移モデル」からの脱却とも連動している。

12 Birdwhistell, R. L., *Introduction to kinesics: an annotation system for analysis of body motion and gesture*, Washington: Department of State. Foreign Service Institute, 1952

だが、バードウィステルの「動作学」には一方で致命的な難点が存在する。それが見事なまでの要素還元主義である。バードウィステルは「動作」の“語彙”目録を下図のような奇妙なアイコンを使って作成する。



そして、実際に観察された行動連鎖をアイコンを駆使して記述する。その上で「行動形態」(Kinemorph) という一種の「構造」概念を使って複数の「動作」を一つの纏まった、そして社会的な意味を有する「行動」(Action) にまで合成・組織化しようとするのである。例えば、以下のよう

1. Child: 3/2 || 3/2/2 ^ ^ 3. t 1 # ^  
Mama. I gotta go to the bathroom.
2. Mother: T 'ee' 1 3 x x 1 1 1 3-3-3

その際に、バードウィステルが「音声学」の「音素」(Phoneme) や「異音」(Allophone), また「形態論」の「形態素」(Morpheme) など、言語学の術語を転用しつつ「異動作」(Allokin), 「動作素」(Kineme), 「動作形態」(Kinemorph) といったタームを考案・使用したために、例えば哲学者のJ.クリステヴァなどに、言語とは異なるコミュニケーション・システムの鉅脈を折角発見し、その体系化を志向したにもかかわらず、結局は言語メタファーに再び絡め捕られてしまった、と評されることにもなった<sup>13</sup>。だが実際には、バードウィステルが導入したのは要素還元主義であり、それが言語メタファーの導入と見紛われるのは、当の言語学そのもの(精確には、言語学の“主流”派)が要素還元主義を採用しているからに他ならない。

バードウィステルの「動作学」的アプローチを受け継ぎつつ、その要素還元主義を超克して、ノンバーバル・コミュニケーション論に革新的なパラダイムを拓いたのがW.S.コンドンである<sup>14</sup>。

バードウィステルは「動作」(Kine) の同定にあたって、身体動作を「差異的意味」を有する最小単位にまで分割を続けることで、謂わば身体動作の“微分”を遂行した。この動作の微分化作業をバードウィステルは「微小動作学」(Microkinesics) と呼ぶのだが、コンドンはこの「微小動作学」をその極限にまで押し進めたといえる。コンドン例えば、二人の人物の会話の様子を音声と共にビデオに録画し、フレーム単位(約

13 Kristeva, Julia, Σημειωτική : recherches pour une semanalyse, Sevil, Paris, 1978, c1969 (邦訳『セメイオチケ』原田邦夫, 中沢新一ほか訳, せりか書房)

14 Condon, W. S. and Sander, L. W. "Neonate movement is synchronized with adult speech. Integrated participation and language acquisition". *Science* 183: 99., 1974, Condon, W. S. "Speech and Body Motion Synchrony of the Speaker-Hearer". In D. L. Horton and J. J. Jenkins (Eds.), *Perception of Language*, Columbus, Ohio: Merrill, 150-173., 1971, "Sound-Film Microanalysis: A Means for Correlating Brain and Behavior". In Frank Duffy and Norman Geschwind (Eds.), *Dyslexia: A Neuroscientific Approach to Clinical Evaluation*, Boston, MA: Little, Brown & Co., 123-156., 1985

更に驚くべきことに、この共鳴は発話者の声と

ら判明した（下図参照）。



も観察されるからである。

互同調」「引き込み」が生じなかったり、また逆

成・創発していることを示している。

導入することによって、バードウィステルにおい

てはその理論的障害となっていた要素還元主義を完全に払拭し、「身体動作」のダイナミズムそのものが生み出すコミュニケーションのメカニズムと構造を解明する糸口を掴んだといえる。更にわれわれにとって見過ごすことができないのは、コンドンの研究によって、われわれの身体が個々人の皮膚界面で画定されたものではなく、間・身体

的に連繋し、個々の身体を超えた一つの超分節的(suprasegmental)な身体システムを創発し得ることを実証的な形で示された点である。われわれは、このコンドンの極めて示唆に富む知見を活かしつつ、われわれ自身の「身体メディア」論構築の作業を進めていきたいと思う。